



西遊記見八丈傳
二十卷
第九卷

特
曾
600
266



600
266

曲亭翁編述



本輯中第五版
無此印係偽刻

南總里貞人犬傳

九輯下帙下上編

柳川重信畫
溪齋英泉畫

江戸書林文溪堂精刊



八犬傳第九輯下套下引



余性也僻常非同好知音不交也是以微軀生於江門而
 交遊罕于江門唯遠方有二三子在所謂和歌山篠齋南
 海默老飯高挂臆名久是已約這個三才子每見余戲墨
 諸編相喜評定寄之于余以問當否為娛樂故郵書來往
 不為遠千里譬如鷺去雁來春秋不靈今茲逮本傳結局
 三才子逆聞之或詩或詞各詠所其長祝頌是書有始有
 終句句皆金玉不但增拙著之光耳褒賞幾過分矣雖慚
 愧不知所閣然不可藏秘篋且為蟬窠也即便附載於此
 以代小序云云時戊戌端月 蓑笠漁隱



のまゝのまゝに徳を結ぶ美を先んずるに
可也 亦わさるハ川の玉四方に集傳身如人を
何處に如
加此星乃百有八の持統と云毛此ハ
むらさき末末の辭

○ 菘笠漁隱曰。所録前後錄客歲到来遲速而已。
非撰擇以為伯季也。江湖緜閱百君子其熟思
之

董齋盛義書



讀書自嘆
休向世間訴不平
疎狂聊亦藉
人情淡來未了書中趣
為
浮名過此生
吾欲與繼福

菘笠漁隱又曰。是詩故兒弱冠時所偶作。曩撈
遺篋而得之。雖題詠非犬士之事。然其要似夙
知吾意衷。而有所志。因錄備遺忘。蓋彼之短命
不見是書。結局而述矣。不得無遺憾也。
盛義

南總里見八犬傳第九輯下帙之下甲號目錄

卷第

第百二十六回

政元弄權分正副使
大江臨別借忠良僕

卷第

第百二十七回

能辯講軍記薦餅
窮鳥還舊巢巧轉

卷第

第百二十八回

士卒矛盾防自家
餅書因教告秘密

卷第

第百二十九回

五條頭代四郎啓宿憂
擊劍場親兵衛見武藝

卷第

第百四十回

犬江仁名揚華夏
左京兆恩厚東臣

二六

第百四十一回

惡報失明受事懺悔
神助因妒反成真罰

二七

第百四十二回

誣兩滅辰已貽詐簡
尋故事政元疑名畫

二八

第百四十三回

點虎眼巽風鬧公文廳
數眾口京兆誅祿齋屋

二九

第百四十四回

大江前諾請關符
澄月一謀殲五虎

三〇

第百四十五回

獻五頭眾奸卒喪數頭
櫃脚小惡師徒斷手足

八犬傳第九輯下帙之下甲號目錄又乙號目錄別出於第二十九卷首



堀内雜魚太郎
眞任

鍛冶子
再太郎

田力助
逸友

高野
一但

大刀はなはたきなり
ともいふかきり
打のせと母まき物
あー 羊岡人



管領政元
松平

竹林巽風
松平

直塚紀元
松平

奇貨忘神祐
諛閉禁使臣
欲謹蛇足過
驚虎魄傷人
題政元
及巽風

深窓 猶有
破隙 雪吹
小祖





女君都木
姫

女君竹野
姫

ふふそりてねの
月とほらむ
頼鳥齋

女君
姫



女君静岑
姫

女君城之
姫

姫小き月
むきとほらむ
のむとら誰の

女七君小波
姫

女八君
姫

里見後の八女の内中五の君濱路
姫の端像既前輯

八女内中五の君濱路

八女内中五の君濱路

本傳出像の人物不面貌の老ると弱く不審と本文小合ざるあり。看官疑ひ思ふべし。
 聊爰論辨と壁言金碗大輔孝徳入道、大法師嘉吉元年辛酉の秋入孝言の自
 殺の時彼身の甫の五歳之徳而長祿二年未至して伏姫富山に夏あり一日孝徳死利と看
 めれ祝髪行脚の僧あり一乃二王歳の時是もこの年紀の第十五回風く作者の
 自注あり今これをりく僕れ文明十年戊戌の夏、大行徳る古那屋之信乃九歳
 現八時二歳小文吾十歳親兵衛初名貞平等二歳遊遊去ける時、大ら四十二歳ありぬ。
 是より又六稔と歴て文明十五年癸卯の夏、大ら宿望成就の日、大士と相伴ふ。
 安房へ歸り來りけり年四十七の時、五十五のまゝ至るも本文の折る年紀を具不
 誌さども創よりして推考へ看官紛れあむもあむ。余る小第七十二回甲斐の指月
 院の段前柳川よりして吾如意なる處にいと、大の面貌翁備て六旬許の老僧に似
 正。後これを画く者其も亦本まざるもければ弥光て相應かむ。又登崎照文長祿

元年小の父輝武が富山川に溺死す時、いも彼名と必是少年多るべし。是より二十
 二年と歴て文明十年戊戌の夏照文の徳之出世の時、齡三十有餘也、大史第るむ小足
 よりの後光陰才六稔の程多し出像の面貌翁體て五十五ありの人は見せり又大士内
 中犬田小文吾髻歳より角舐と嗜て大漢多るも、本文相見えり余る不出像凡庸
 なく、自餘の大士殊とるを、惟第六輯の画工英泉の意とせゆけ第五十八回
 小文吾が市河を依入夫婦の再會の段の出像、全身肥満の大漢画小看官の則々
 る出像、眼熟れて妙とせむ、も只隠るる過うとのみ。又扇谷定正修理大夫持朝以季
 子との管領の亨徳年向よりして鎌倉扇谷の館在あり、時の人相稱を、扇谷殿と
 のひけり、かくて定正鎌倉退くの後、明應二年十月五日卒り、享年五十二歳、事實の鎌
 倉管領九代記不詳、因て定正卒去る年、明應二年甲寅より溯數れ、本傳第九十二
 回、文明十五癸卯の年、道節信乃も復鎌倉、定正四十二歳の時、然るとるの段、出像あり

定平面貌最弱。吾一知音の細評その弱を疑ふ。云云と向れあり。但その差錯の
るを人よ誂てのまねれ。不如意の言れ。就中今論より人々の本傳中より有名を
殊尤著るれ見巧者多の疑て其を作者の所心あり。と云ふべし。然りければ人の
うちよよを其齡より面貌の老るの弱は只官の年歳を數てその面貌の合さる訂さ
反て理評する。況本傳の画工一筆あり。各作者の画稿は據て洵色と譽言と取ま欲はつと
りて婢妾まの画く美人なる。画工と作者の用心同か。反に知る不足む。故畢竟遊戯
三昧なる。画像の婦幼の與りて和漢稗史の花れ。是れ故作者の趣向を。知る
い。むむ花を愛る。実を思ふ。実を嘆る。花を觀る。誠好く。善讀者。必文を
先して。後よ画像を觀ると。画の縁りて事の趣。夙悟れ。讀見時。興薄く。む
數。現看官も用心あり。有る中。中を信る。知音の世。又易く。漫の戲房。ち
閑て。画像の上。自評。人の疑難を解く。本傳結局大團圓。遺憾なき。む。む。む。

○画像の差錯。猶許さ。本文に至りて。看官訝り。思。誤寫り。ん。既。前板第九輯
下帙の中の五卷も。校閱老眼。届りて。見送り。る。發販。後。再校。され。〇十九の
卷。六丁左。上帙の自序の内作者。暗記の失。訂。野中狼之介。又野中當。云。云。と。あ。
野中。の。山。中。の。誤。其。実。品。河。山。野。中。共。品。河。作。同。卷。十四丁右。念佛の
念字。上。の。一。缺。〇二十の卷。十一丁左。長城生の隊。云。云。と。あ。長城。の。誤。當。根。生
野。作。同。卷。廿六丁右。影職。影。頭。の。誤。字。同。卷。廿六丁左。箕。も。て。の。傍。訓。の
その。誤。刀。之。當。み。他。〇二十一の卷。九丁右。勇猛。精。進。の。下。の。傍。訓。を。へ。
〇二十二の卷。十丁左。忍。心。圖。誤。寫。之。團。當。岡。作。同。卷。廿三
七。壯。介。當。壯。介。作。同。卷。廿七丁左。中。條。弟。兄。と。あ。中。の。誤。寫。中。條。當。十
條。作。〇二十三の卷。三丁左。長。挾。介。の。挾。の。誤。寫。同。卷。九丁左。百。會。尤。の。傍。訓。誤。刀。之。當。
十二丁左。君。所。の。傍。訓。誤。寫。み。ち。他。〇同。卷。九丁左。百。會。尤。の。傍。訓。誤。刀。之。當。
五丁。

ツリホ化るべし〇二十の巻 初丁右 第百二十四回 〇二十の二と三の誤寫本回則百千
 四回と同卷 八丁右 棘鬚魚堀元龜八の名號吾一知音の評小石龜屋次園太の初
 名と鯛の堀源八とのひとあざめて是を同名とて訝れ然れども鯛と棘鬚魚と
 源と元龜と共小音訓の同くて其字の各異之既小兩個の出来介あり同名も亦作者
 用意の短又源八元龜八現八も同名あり水滸傳る張青と張清の如きされ
 同號紛れ易るべければ後小棘鬚魚堀の堀を改骨と云知音の評小從へ同
 卷 廿五丁左 稟上の上の缺するなり同卷 廿四丁右 舞雲雀の歌不やその都
 遠の云云是を富永とせ異説紛らざる作者暗記の失之の歌應仁記の據
 飯尾彦六左衛門 常陸の歌あり上の五文字汝や知るとあり亦知音別人の
 評小心つけらとされ鮎々刊約の書肆小誂て重々補刻されども既小數百部揃出
 あり後るれば今又あり大既木を擧ぐ訂漏あり猶あり

終

南總里見八代傳第九輯卷二十四

東都 曲亭主人編次

第百千回 政元權を弄びて正副使と分り
 大江別小臨々忠良僕と借る

復説大江親兵衛の蚤崎照文と共侶小京師の公務も果も一身の暇と賜らんと
 管領政元の邸小詣り政元即便家の家臣西復六をりてめさるる遠路の使との
 甲斐ありて首尾残る所を而御所 東嶽大義お思召る 歸國の暇を稟す 情願
 介るるに尚ほ示さるる上御内意のきまを明日己の時候小参る 面談の期あ
 りんと親兵衛を来りて肚裏お思召る 地の公教の首尾宜く宜直並御教
 書と既小遞與させぬは何もの御内意あるらむと評るの推して向んこと
 かて照文と共侶の言義も稟す 鮎々歌店小退治て當晚姚雪代四郎小件の二義を

其後告ふ代四郎も亦訝して左へ右へをわん狹く思ひ難れ照文の心かき尋ふ沙汰推
 量果あるものか。却説其詰朝親兵衛照文と共保代四郎以下自他の伴當も昨の如
 従々西陣多政元の邸に赴きて伺候のよし稟せ申す。青侍們も客房へて案
 内より立程ふ土圭の轆る音近く夢を己牌を多りおける姑早く香西復六を親兵衛及
 照文の對面多し示命違ふも伺候の時刻の早よりと勞ふ却ひ申す。主君今朝も
 花の御所へ仕の留守を程も退出の候へ。豫吟吟られ申す。甘くて等ゆぬ
 と。別室に誘ひて準備の酒盃と薦め又晝饌と羞る小青侍們給侍は連々佳
 殺珍菜の種々ある。款待可憐なりけれ。親兵衛と照文の心く訝る胸安らざる。今更何
 の故のぞ。這盛饌賜ふ申すと思ふもの。問難て終つて舒恩と拜く。只得る儲
 就に小青侍們の送代も益々薦め饋と添且晝飯と羞る程。秋の目されも托もせ。
 未の刻近く多し時候御食膳を登り果へ。香西復六も申す。親兵衛も向ひく。

主君方僅退れり。然れども不娯からし對面と仰ら誘ふと案内とされ。
 親兵衛と照文饗饌の終つて稟へ後立引れて正廳に赴け。既へと管領政有司並小
 近習們を侍して。儲上座在り。當下復六拜謁し。東使見参のよしを申す。政元
 隨即親兵衛等と間近く招き薦め。席と與へ示す。東使の歸國と抑留も。今日小
 速ぶ。是れ私一談のあはれ。仄の聞ぬ大江親兵衛。少年より武藝勇力関の八箇國を敵
 たり。然れ角を折れ拵を抗る。脊力の義秀親徳と兄と。且殿。劍白打馬の精妙牛
 孺丸も猶優ま。この身單之那館山城降る。逆將甚田素藤。二たひ
 ま。虜小あける大功備。云その事の崖略。昨今人の風聲を。這裏も專知れる。小
 小當將軍家。尚青年ふまは。文武兼備の御盛徳。當家拔萃の君され。干
 食宵衣。今事敏。世やあれも。攻伐軍旅の暇。折々治要。方と當。與。且和漢の
 博士。課。史傳。の。開講。の。毎。の。席。に。在。り。又。の。時。に。馬。の

過言同輩暗譚の私議を以て已に隨多しと云ふ將軍家の台命と固辞する大不敬
 その身一箇の罪を以て義成の上るるを覺期する欲いふを云と權威を示す柵見不垣留り
 秋の水流れもあは濃淡に顔丹楓の主人の勢ひ脱る路多しけり登時香西復六も膝を
 找り主朝にをるる京を以て目今親兵衛が不慮の過言の京師のみ態不熟なりけり田舎
 児少年を以て許さるる臣を以て又論を以て義成仔細に云と寛解て些一退却却親
 兵衛うち向ひて大江生を義成遲滞の只是千慮の一失飲いでもあるに云今番安房殿の
 願ひ允されたる筋より我主君の提擲京より兩御所棟山格別の止言と云
 異議なく執奏せしければ日多しを救許の飲ひあり和殿們君臣上下の面目世を得たるを
 あられの寡君の好意と將軍家の御洪恩を以て非如一年に在箇月這地不留め
 とも固辭京を以て義成あは忠中あは自滅と招世の胡慮なるるを登崎生甚麻
 云と問れて照文然し親兵衛が云云と波り京を職分を人譲らんと思ふ不在り開の理

台命の最も惶に教諭の外は在下則宣言と護なり御教書と相捧て
 安房へ退るる徳々と返命仕る義成必執て義成なり親兵衛が淹留と疑ふべし
 と答る備と見ると大江生聞き事既にあは速べり親兵衛勿論をんかとのられて親
 兵衛頭と拍突然我不肖多京師のみ態を知らぬ田舎見れば天子將軍を
 思ふるあはれども人各その主の與ふ昔漢の蒯徹が韓信の與ふ壁言を取て跣が拘完と云
 とのり宣示以ある然る今只管不志と立すまれば主君の上不妙なる進退惟谷
 了らば枉て仰不従ふべしと云ふ京を以て香西親兵衛の既不義服仕る
 過言の罪と恩免あは在下も幸ひるんと倍話る復六も開て開て開て珍重
 あらわてをいれと答て身邊不膝と找り両を衝て京上なる親兵衛と云
 云と解醒志ひし他正使と云りて返命と副使仕せんと云惜まらば一旦御諷不悖
 了らば後悔義服仕る不敬の罪と釀る田舎見の疎忽也且少年の恩免と云

願いけれと勸解れ政元點頭て今六親兵衛先非と悔て稟ま忌状不相違るは十
一郎も同意多後と向ハ親兵衛扶と申と遲鈍の本性を尋く御説美の公只死
指揮に依るれと心とされ照文も俱小良りと宣示まお政元然とと又點頭て今六復
異説も十一郎の歸國を總ての事此趣と房州義成下か又親兵衛今より
多て將軍家の召入る市中の旅館宜くを明日の歌宿と我郎は徒く異見御沙
汰も多しとの美の香西復六の豫あるとたれ退りて宜く談とと宣示一言果て扇と
令て身と起せ近習們前後不從て俱小奥中を赴け佳而香西復六と四個の有
司と俱小親兵衛並照文と誘引立て客房退りて俱小坐と占て今日公裁危く一
及て安んよ至の思飲びと演ていさう剛才寡君の仰まどく大江生の本郎林亭と宛るれ
明月風起て移りぬ然と伴當多く留んを益と似ら大江生の給侍の本郎の僅
僕とりと不自由るうとあるとある君命よハ従来の伴當の地の残り住る者ハ方小

旅宿を賜ふ。井も窮屈と思ひ初め客店に逗留せしめけり。その美とあり
ゆゆか。と告と親兵衛うち听て傳達の如く上目美のひぬ身は隨も伴當の若黨雑色
奴隸と俱十餘名を過されども。僮僕さ小隸めつ。逗留の中。要る者ハ旅宿の他
情願の儘まぐやひむと心とされ照文も復六うち向て執成ふより首尾好りける。飲びを
演且有司們も一個々々別を告て親兵衛と共侶退りて外面に立れば代四郎以下の
伴當の申さるるま着て俱く歌店に還る程。晝の既小散じて下晡よりけり。却説親
兵衛と照文のいそぐ歌店に還ると軀て頃者居る奥の貸坐席へ代四郎と招はせり。
御高政元も傳へれる。台命の事の趣箇様々々と告知されれば代四郎听々眉と頻りて開と
最不便のりる思へとも和子の武勇のや華洛のや。徳孤るを隣あり。所以も
やひんと親兵衛推林林めて否とも我身再世ふ出で里見殿仕なは。この春よりのみ
素藤征伐を除くの外屢軍陣に敵と屠りて。名と頭と。いふは。何人が。稟しと

將軍家の知食けん疑ふはの二つ且當將軍家の文武の徳よりはせむ哉捕追物の故
式は再興ありて亦肉まると世の風聲もつえられも亦時小依るは近屬六角高
頼が叛記ありて朝参の礼絶れ將軍みづろ觀音寺の城を攻伐めんと軍勢催
促ありとのちのちも亦都人の風聲も粗々えり実尚然る折るは珍しけり馬の技を
御覽せんと東の使と抑留よと仰まらるるは疑ふはの二つ又我旅宿を轉して
管領の邸に召置れ那内人と給侍と隸て我伴當と一緒にせむと旋りて弥誣かへの如に
敵の降人欲罪ある武士を御内人の預置る法則に相似り是疑ふはの二つ此を思ひ
彼は約莫今番の淹留凶謀く吉少か然る思ひはとと悄悄に照文も亦聲を
悄めて咱も亦始より疑ふはの二つ然るは深き思ひはなれば何れいふ事なり
やと困て頭と病まれ代四郎听り創り悟と眼と睜り氣と凝らさるるは又い
よもろり親兵衛微笑と慰めて更然る思ひは屈して非如那議所所以ありて我身と

抑置るはの折を窺ひ路を披れて後易く安房へ還るは登崎主歸國の日西館の京
まもゆと義兄弟の父母の真意もこの意を示し慰めてはるるは又いふ事なり
ぞよと照文の果をむけのれはの二つ只恨らるる身も共侶に這里に憂ひ分ふ
由るに宣旨御教書ありて争何せん和殿の萬事小神々あて知仁勇の三徳われ縦利ありて
誘引るは義の背を感ひるは火水に中措るは善あるは思ひはの二つ猶千金の
身を愛して一日も早く吉信をせむと慰れ親兵衛連の嗟嘆して我心の石も亦榮
爵高禄甲まされ利をりてせむはの二つ輒されん意も我義兄弟七名ら
各々窮死あり折九死と出て一生の日の艱難憂苦も修すは小毛骨煉りふ
咱も且裏の妙椿が妖術ありて疑ひも真景て他御遣される開も須臾の程ありて館の
疑ひも鮮け及て功名面を義兄弟等小拔萃る心の傲りあせむと今歸路小柵
掛て又窮厄も遇ふは秋も姫神の神護り也且裏の奇子崎の水難もかゝる我爲

る。悟れ。後易。り。代四郎。ら。智者の主張。然も。あ。命り。と。那郎。逗留。程相。従。伴。當。一名。あ。む。事。便。の。胸。安。き。日。暮。餘。人。知。小。可。那。里。も。隨。ふ。れ。と。惴。れ。親。兵。衛。頭。と。掉。り。亦。要。る。擬。勢。へ。更。那。郎。在。る。と。も。咱。等。と。一。外。直。れ。又。何。の。意。あ。る。開。と。思。後。悔。あ。る。と。諭。其。代。四。郎。沈。吟。と。然。折。々。那。郎。へ。安。否。と。問。へ。れ。と。親。兵。衛。亦。不。し。と。豊。の。主。意。猶。淺。く。一。緒。置。れ。我。伴。當。詰。來。て。安。否。と。問。へ。と。輒。對。面。と。許。され。る。益。不。し。と。期。推。て。示。き。意。見。入。代。四。郎。困。り。一。霎。時。默。然。と。浩。然。と。登。崎。の。伴。若。黨。某。と。遠。く。這。奥。坐。席。小。末。ね。と。照。文。を。見。て。開。き。某。と。飲。所。要。あ。る。と。問。ひ。若。黨。跪。ひ。否。別。義。出。ひ。と。豊。裏。お。奇。子。崎。より。丸。團。許。か。遣。され。る。紀。三。六。所。要。果。一。見。迹。を。慕。り。目。今。ま。あ。り。と。止。り。照。文。點。頭。と。亦。奇。特。の。事。と。他。今。來。れ。と。と。商。量。敵。あ。る。と。一。只。兩。館。の。御。安。不。し。伺。ひ。知。ん。と。と。親。兵。衛。咳。け。紛。

ら。禁。め。不。登。崎。主。今。日。紀。三。六。が。座。の。多。う。是。究。竟。の。便。宜。の。故。箇。様。と。信。信。の。密。議。も。是。の。計。好。ら。と。耳。示。せ。代。四。郎。も。俱。願。と。駢。し。听。ひ。只。顧。歎。賞。し。と。齊。一。笑。局。入。る。程。點。燭。時。候。り。店。小。婢。が。引。提。來。行。燈。坐。席。小。措。居。て。傳。練。運。送。饌。と。三。個。の。客。薦。れ。立。ま。若。黨。と。照。文。や。と。喚。禁。め。て。今。己。の。口。腹。い。と。今。己。の。口。腹。い。と。今。己。の。口。腹。い。と。店。小。二。吟。明。て。他。の。飯。と。先。食。さ。と。喫。果。さ。這。里。か。と。急。其。若。黨。の。ろ。果。て。已。が。歌。の。外。面。の。貸。坐。席。を。退。り。け。小。程。親。兵。衛。と。照。文。代。四。郎。相。飯。也。と。夕。饌。と。過。圍。坐。し。て。密。策。と。相。譚。ひ。俱。紀。三。六。を。程。姑。且。と。紀。三。六。の。行。装。の。儘。折。折。裳。と。解。降。し。刀。引。提。は。這。里。來。て。咳。け。内。へ。入。り。次。の。間。際。の。敷。居。の。邊。へ。御。で。刀。袂。達。着。し。ゆ。紀。三。六。と。照。文。先。登。思。ひ。よ。り。早。か。先。兩。館。の。御。安。不。し。伺。ひ。且。談。先。も。あ。れ。と。這。方。へ。找。



ねと招け親兵衛代四郎も共侶の勞ひて今自他留別の折を位て和郎が来る便宜
 因て談き密議あり間遠くて耳をきかんと許さる紀三が屋内入る代四郎が
 次小坐の照文と親兵衛を向ひて又額衝つ聲を低めて却稟上なる焼雪主も聞召れよ
 小可且裏お昔子崎より宛許へ返され折波の上障の多館の御沙汰も好首尾なり
 ける始の箇様々終り又佳く然いも焼雪主行儀の折老館の御仁慈を御よく仰
 られ小の始より稲村を及て奇特不思食光因て這回大士達商量し先老館の
 告まると情地お上見伺ひあり又佳くお計ひも注進狀の別翰の稲村披露及れど
 ろどと館の焼雪主の水陸二箇所の武功と殊小言をせめて二三士俱の歸國の後宜く
 御沙汰あると仰られ候とぞえの然二両日と那裏の御要果一ふのてはなる趣の報
 らと思ひて身の稟賜の今番は只我身單を港口お歌り昔子崎の央船か又ち
 乗りて西と投て赴折有司奉り大士お候て小可路費を賜り刺那央船の截領高工

們小まお錢多く取せぬいり誰か飲ひ勇まると折も亦順風で日る昔子崎小
 船返され那地の領主隣尾殿の家臣とぞえ錦織主の宿所へ赴けて大士達の謝書を
 届けまわせ且小可が情願の箇様々と告り錦織主欽び感して隨即主君おゆえ
 上内命より小可の宿所留めて便船と那這と討させられ尼之崎へ還ると海船わ
 ぎ開載られて錢と費も亦復日毎順風で湊歇とぞえ昨日晡時の左
 側よその船尼之崎の果一船馳て浪速に赴けて歌措せぬいり船の鐵師高工役夫
 們お奴宿所と認る程既して日の暮され只得船お明ると等て今朝風より西へか
 秋の目るれ十二重とゆふ中お走の果て方僅着到仕の宛國許の西館と初なる孰も
 さるごお家の内毫も恙御もなきの餘のゆも大士達の消息おとせぬと詞せり来
 い意と報て推考らける書翰匣より道節小文吾も回報二通と膝と找めて照文と
 親兵衛お遞與とも俱お受合て欽い特法を先両侯の恩と拜し且紀三の思

心之或ハ譽或ハ勞ハ各その書の封皮と折て燈の下黙讀る程小側聞者代四郎今
 そ心の花開く感涙坐す此むき身のかげの堪ざり席と避り東に向ひて只兩侯の洪
 恩徳誼と俯仰せらる念と拜謝肝胆と凝り念と果れ親兵衛又代四郎と
 身邊招けて雙先を見せり我義兄弟七名連署の回翰載られ其事の
 趣今紀二六が報ると然るる精疎るけれども見て思へ意味深多先听めと
 件の書翰と二つ用て微音の讀むと代四郎情听果て貌と更め顔と衝小可何
 らの過世ありて然兩館の御慈愛恩澤真加餘るの事故主道即の庇り又
 七箇の武士達の愛顧よりその幸あり驥尾の蒼蠅虎前の野狐兔もなる我徳を
 らぬと思へ僥幸ける天をそらふと托と親兵衛のあまのそ獨叟のさるぬ咄も
 亦兩館の慈恩愛顧と今爰千萬言と謝するともいふまで盡し願ふ念とく
 幾までもさる日なく報恩の時とさるそよめれと論ら傍とさるて喃登崎王今急

務ハ那議在快紀二六其示とあるる心屬れ照文ハ然也と紀
 二六をその身邊召侍と情地は示まの地の顛末箇様々と送る鮮くと
 約莫羊响許鮮果て又さる管領漫公意と借て大江を抑るる旅宿と邸
 程さる伴當と一緒せざれと旋らる故とある今更主僕を分られてる客店
 残る者焼雪野兵甲まされ或大江主の安否と訊ね或市中の風聲と情地告
 欲さるとも輒く對面と允さるる推量果て違は履と隔て癢を搔く心焦
 燥と増さる事益る争何のせむ有候れ我も俱居て真愛と分り朋友の信
 義をあら盡さん素より望む所なれ然と宣旨と御教書と捧けて安房立か
 へく兩館の返命を付る日を幾日とも知ざるむ开中不忠也臣者の本意あ
 ね首鼠兩端ハ決難る事最難義の折るる汝が來ぬを幸ひる因て大江主の
 計いあり汝の酒家ハ做代と地の留り歌店と異ふ經紀見るふ打扮て那邸ハ

入其方便、以大江主の旅宿おき、立入り。那隸僕們の親くるべ、王の逢ふ日も
 ろくも然つと、那里の動静と、姥雪叟們的報知せ、又巷談街説と、那家中の秘
 事と、知るも、れあるべ、大江主、感山告く、後の便宜あると、あつち、酒家、代り
 ぬ、和郎、過、大役、よ、せ、か、と、情話、け、親兵衛、も、亦、お、き、紀三、和郎、の、棟
 人の、か、の、伴、お、立、ん、と、千里、の、水、行、を、遠、と、せ、今日、も、這、里、來、よ、け、を、我、が、故、と、
 かの地、お、留、め、て、又、一、役、と、課、ま、る、と、の、忠、誠、の、志、を、思、は、る、お、似、れ、れ、も、その議、は、但、我、上
 の、ま、ま、で、第一、館、忠、節、を、則、その、忠、節、の、你、が、東、人、蚤、崎、主、の、志、お、代、り、と、其、ま、の
 與、お、も、忠、の、義、の、を、思、ひ、感、ひ、を、因、て、再、以、る、お、汝、經、紀、見、お、打、扮、て、那、郎、お、入、
 ま、る、お、人の、汲、引、お、據、る、お、あ、ね、お、門、子、們、許、り、て、入、と、と、允、さ、は、べ、其、頭、の、為、お、究
 竟、の、東、西、の、量、義、お、調、貢、の、金、銀、諸、色、を、浪、速、の、浦、より、運、送、の、折、香、西、心、を、屬、て、
 非常、の、備、お、せ、よ、か、と、遞、與、お、那、家、の、木、牌、お、あ、り、紀、三、異、日、那、里、お、め、く、内、お

入、お、る、折、木、牌、を、お、く、門、子、們、お、示、さ、障、り、あ、る、と、い、う、傍、ら、う、て、叟、お、量、義、
 預、け、る、那、牌、お、く、お、出、ね、と、聲、情、ま、ま、と、其、代、四、郎、お、有、と、と、答、も、果、お、身、起、
 きて、行、本、の、内、の、件、の、木、牌、を、お、く、遞、與、と、紀、三、も、受、戴、は、つ、懐、へ、夾、めて、此、下
 身、お、退、り、て、恭、く、照、文、と、親、兵、衛、お、ち、向、く、詞、徐、お、答、る、お、寔、御、賢、查、お、毫
 も、違、い、お、し、國、許、の、首、尾、宜、お、一、日、も、お、告、禀、と、王、の、帰、路、の、伴、お、立、ん、と、思、ひ、の、ま、
 ち、お、け、お、其、お、増、て、兩、館、忠、節、即、お、も、る、お、死、王、お、代、り、て、の、せ、お、と、仰、示、お、せ、お、い、ぬ、
 御、教、諭、の、言、の、趣、惶、う、も、忝、く、も、鄙、語、お、云、瘦、馬、お、重、荷、過、る、今、番、の、大、役、心、許、
 ぬ、お、猶、お、指、揮、お、從、ひ、ま、る、と、い、う、お、い、ぬ、お、お、代、四、郎、お、教、び、
 如、謀、一、合、お、と、相、譚、お、と、親、兵、衛、急、お、喚、禁、め、叟、よ、その、義、を、お、と、お、紀、三、も、
 今、宵、お、別、店、お、留、り、て、我、黨、お、る、と、い、う、お、人、お、知、れ、お、事、成、ら、ぬ、且、經、紀、見、お、打、扮、
 ぬ、お、本、錢、お、い、何、を、賣、る、お、先、其、金、お、取、せ、と、い、う、お、紀、三、も、お、不、吉、お、國、許、を

退る折館様より賜せし金銀のひそのも初ひ易くそ人倘亦足らぬらむと悦雪
 主とてひんと辭ふを照文うち告て令ふ汝の深夜間も多退ると歌店と討めよ
 倘伴當們が那里も向て我所要よりて香西許赴く今宵の還りかえらんと
 以て快中と論せし紀三六の果て照文親兵衛及代四郎も告別し異身
 契りて外面投て出けり是より代四郎の伴當們の明日の事照文の地と辭し去
 り親兵衛の將軍家の台命より管領邸の旅宿と程と事由と告て準備を
 せられし推續は伴當の雜居の貸屋赴けり親兵衛も亦果先所要の心
 のそれて獨燈の下に立退る客研ぞら告て兩家老東荒川晋達と呈書一通
 と七個の義兄弟回翰又大母妙直を慰し消息と共都々通と一霎時の程の寫
 果て一個々封皮と敷兵是と照文の渡與し今更に消息と寄せべくもあらず音音
 憑しあはるる西館のまもりて義兄弟も我上疑ふべくもあられぬ大母も女

流の曾狭くてとる苦勞と思れ又悦雪の知らるる小郎の拘る性の中も音
 起ゆ折宅着かふも告せりと恙なく今更に消息と寄せべくもあらず音音
 老媪曳の單節もこの意をいさむと憑し照文點頭てそらいるも音音
 對面の折老婦達を極く慰めゆその心易けれも今より這里の後の
 事復も障身の丸の内咱們の早天の立出て浪速の風待せ寝まらぬひの寝
 まるべしと親兵衛再議及ぶ當連のち鼓らり店小婢を喚とる臥草
 儲とのかがり俱枕を就かど照文のとも睡を主僕曉天の起出る行社衣を敷正
 る小親兵衛十名と半分り親兵衛の謀らんとりて親兵衛初に従つて我身伴當
 ことも皆徒おの処不日と弥らぬ事益々蚤崎主の大切なる宣上日御教書を推乃
 ぬ非常の備を貯るくま咱們的悦雪の紀三六の餘の鎗奴鞋奴及柳宮鏡
 櫃を持つ者甲乙五七名と人足れ親兵衛を要るくと辭し照文推返とまら

とも這國伴の十個の親兵を隸せしめ、兩館の御意多ふの期に及び一人も和殿の
 與に留措さず、那奴上首の違ふをそれの、且正使の伴當の部下の寡くする、兩館の
 為に這頭の外聞宜かざる、今こそ要する親兵も、後を用るとあるは、然是も亦知る
 らば、枉ての誤り任せぬと詞を敷き、理と舒て親兵五名を留め、我伴當と親兵
 雜色要する奴隸を相從へ、星斑の秋、明時辰、親兵衛代四郎と袂を分ち、浪
 速を投ていそ、夕の早、晡は速びて、曩の歌て這浦に在せ、船うち乗ること成
 ぬけ、然に這海船の始より、残される奴隸と役夫數十名在り、折々順風を
 受け、鐵師高工、帆の勇を馳、解纜の準備とあり、詰朝帆を揚、東を
 投て走らざる、未過る大洋の、平のなれども、地上の風波定ぬ、始俱來一人は
 抑留られて、獨立の甘屋の松も遠離り待と、夕け、今日も千年と過る心地、照文
 只云と、慰難、舫の離合時、愛哀苦海不娛、一に涯るるりけり。

第百十箇

能辯軍記を講、餅を薦む
 窮鳥舊巢、巧不轉法

却説其詰朝已牌時候、大江親兵衛主僕の任り居る客店、曾領左京大夫政
 元の士卒十餘名、鞍措する馬を牽、來て香西王の指揮、大江殿と迎入、為參り
 いと、喉門、執接の若黨、不有司の書翰を遞與、親兵衛是と披見、隨即代
 四郎を召て、曾領家より迎の與、目今士卒とされ、我伴當の要るれも、然
 我居る那裏の宿所を相届け、皆送憾あり、因て豊と若黨親兵と、五七名の那裏まで
 送らともけ、遮莫思ふ、もあれ、鎗鎧櫃の持せ、舟の歌店、残措く
 下、何とされ、救ふ武器を、推して那裏に造、今世の人心、我不用心、必て忌む者も、あん疑
 ひもせん、の爰を、あつらひ、と論、衣裳と更めて、出、迎接の士卒と、勞ひ那意、不任して
 ねて來、馬と、牽と、を、まきて、乘る程、代四郎若黨親兵、準備果て、奴隸の、毎、親

兵衛の柙を必裏と駝し相従て西陣を改元の郎小者よけれ親兵衛の門前を
馬と駐め降きて引れて内不找入りと奥より重屏ある儲の宿所不伴登時不
隷れらるる僮僕們遠く出迎へ馳て坐席(室内)とて茶を薦る程不兩個の小吏前
よりあつあつが親兵衛に對面して姓名を告り程居の速りて方にて在下門へ君命
より親宿所の預りふいへ何れ欲いふとあつあつ表のむむ親伴當のいふと向れて親兵衛
然し他門の猶舊のどく市店不別れ在る欲を要る者毎ふいへ返一遣まらるるといふ
小吏の異説もその支も豫下知ありて旅宿の這里まれば伴當們的隨意せ
よと命せられて便宜不任せぬといふれより親兵衛の獨代四郎を召登して件の下告
示す代四郎の豫より有憊るべしといひ知りて快と思ふも却在るべしとあつあつ表のむむ親
の退りて若黨夥兵們と共に條を飯店還り然し件の小吏の毎日毎日親
兵衛の慇懃不訪慰めく富君の自懸るるを觀音寺の城御征伐の軍議よりて

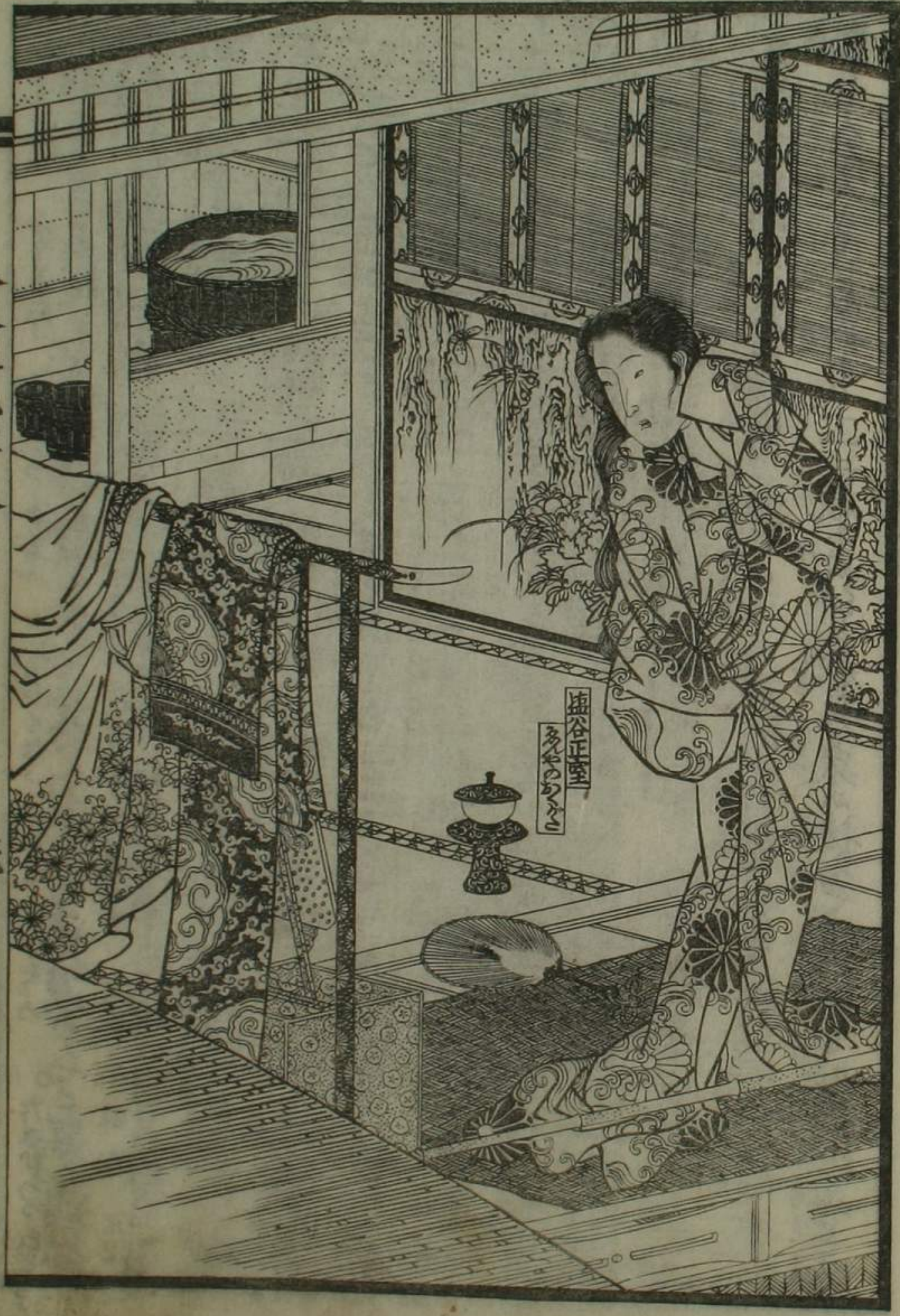
いふその暇あつた故の香西復六も俱不勤むいへ疎濶不て何れ欲りいふ東西
あつた表のいふ介意を仰せられよといふ詞敵あるべしとあつあつ程も身と起して其
頭より檢西より隷僕のを忘れぬ謀々も言微して孰の程よりあつあつ親兵衛の
憶も這里不歇宿と移より那客店に似るべしとあつあつ三食の儲いへあつあつ茶を盧全が
七碗と薦て足れりと甘酒の酔中の八仙も知さずと旨とせると日毎の款待もあつあつ互て
改元の意衷の好夕料り知るべしとあつあつ大江があら倒不極々々と樂まな那燕丹が山鴉
頭より白くも我還るる時日も豈あつあつと日昔不祈るも慰難く單徒然不
堪さけり介程不代四郎の自餘の伴當と共に親兵衛を送る故の歇店を還りより
只顧那里のいふと思難て繞る四目と過り伴當們不談まやう大江王の推量
錯いで今更對面を許されども我先那里赴て安不問も思ふ然しとそ多人數を
疑れて事の障りあつあつ唯不願踏と任ねとあつあつ貌不悄語とて日政元の郎不赴

門子們うち向ひて。咱さ。當所召置る。里見の家臣大江親兵衛の伴當。主の安否を
 知ま欲し。ふまあり。と名告と。あつ。を儘找入さんせ。門子急推林めて。不時殿の伴
 當も。あれ本郎の家法あり。親疎依る。木牌を者へ入まき。決て入れ。出まき。も
 敢出ま。木牌あ。と。かね。詞致系。制。代四郎。眼。睜。否。咱。東の
 行客。御家の法度。の。知。縦。牌。も。往。親。衛。俱。て。西。番
 當。門。内。入。者。各。位。然。る。の。回。善。あ。む。む。然。と。猶。許。か。こ
 早。人。走。と。親。衛。告。紛。れ。あ。む。口。説。く。門。子。冷。笑。て。烏。許。我。們
 當。所。守。る。是。要。緊。の。職。分。ふ。人。の。與。提。接。き。暇。絶。て。る。あ。む。已。ぬ。と。容。め。後。更
 応。せ。り。代。四。郎。困。果。て。今。も。知。ぬ。大江。腕。子。の。推。量。果。て。違。ひ。他。の。上。の。心。許。み。
 和。田。合。戦。の。義。秀。さ。な。破。難。け。の。門。の。旋。只。得。横。牌。の。下。ま。立。つ。と。半。晌。許。
 只。の。上。紀。二。六。の。做。事。あ。む。を。あ。む。と。あ。む。思。ひ。入。て。他。那。里。取。求。め。ん。を。せ。る。尚

知る。よ。も。事。の。不。便。立。腹。厭。て。還。る。二。條。旅。路。の。川。障。り。下。り。托。果。一。さ。り。の
 案。下。不。題。直。塚。紀。二。六。の。衛。照。文。の。教。諭。お。従。ひ。且。親。衛。計。を。受。る。宵。より。五。條。頭。の。客
 店。在。り。二。三。日。の。程。准。備。既。不。敷。い。小。經。紀。兒。の。模。様。打。扮。て。脰。裏。着。脚。絆。を
 穿。込。尺。四。寸。許。の。販。櫃。小。館。餅。を。糴。貯。て。搭。駝。ひ。つ。駝。て。改。元。の。郎。後。門。内。赴。け。り
 門。子。們。告。る。小。可。の。香。西。大。人。の。老。僕。達。由。縁。あ。り。小。經。紀。兒。で。い。今。番。鎌。倉。上。り。程。り。あ。り
 い。ち。だ。郎。立。入。り。糖。霜。餅。子。を。賣。ま。欲。き。因。て。賜。り。る。木。牌。の。在。り。今。上。り。と。日。毎。々。あ
 出。入。の。仕。づ。め。れ。ぬ。目。水。く。え。れ。ま。ら。ん。と。の。尚。ひ。な。ら。ぬ。の。遠。く。懷。より。木。牌。を。出。て
 門。子。們。の。身。邊。お。や。と。閣。下。又。遠。く。果。子。金。餅。を。堆。高。く。装。登。し。且。折。乾。と。寫。し。一
 分。許。の。金。一。裏。と。又。懷。より。合。出。て。情。地。是。を。推。薦。め。あ。む。見。て。左。右。さ。し。合。さ。し。中。の
 可。が。心。祝。ひ。の。門。子。們。ち。合。笑。ま。木。牌。を。又。金。見。て。左。右。さ。し。合。さ。し。中。の
 老。一。人。が。紀。二。六。向。ひ。て。汝。香。西。殿。の。内。人。由。縁。あ。り。と。木。牌。三。持。を。い。ふ。と。誰。拒

といれざる。然るに人情の必要なるを。枉て姑且預り置ん木牌の腰に佩て
 賣買を果て退り折出て足先障る。餅の背にのりて。門卒も遁與ねが。由ね
 ぬねと尊大は。願で誨る方言。四圍訛の技ねども。脱齒を洩る聲散て。柘榴の露飲水
 涕の落る。知る。取當坐の免許。紀三六。阿唯々々と。心とあつ。先木牌を。受合る。腰に
 佩て。又遠く。脛と伸し。餅の盆と。揚て。卸る。販櫃又肩へ。登ら。みを。掛く
 腰を折り。歩早。守屋の背へ。赴けり。介程。紀三六。計策既成。門戸の出入自由と
 ぬれ。則ち。日と初。足輕。雜色。奴隸。毎の。其隊。よ。合居。大部屋。小部屋を
 うら。巡り。糖餅を。勸賣。ふ。素より。生活の。為。せ。れ。殊。小。價。と。廉。く。て。本。を。減。せ。ど
 數。と。多く。銭。と。少。者。の。賒。を。債。り。も。せ。り。誰。の。愛。欲。と。日。毎。他。が。來。ぬ。所。を
 等。て。買。ま。く。思。ふ。も。三。月。の。一。箇。月。も。及。ぶ。と。親。愛。年。來。出。入。者。經。紀。兒。弟。増。て
 ある。時。の。晝。飯。の。餘。も。合。せ。食。せ。又。ある。時。の。茶。と。者。煮。て。薦。め。買。う。他。が。餅。を。分。ち。合。

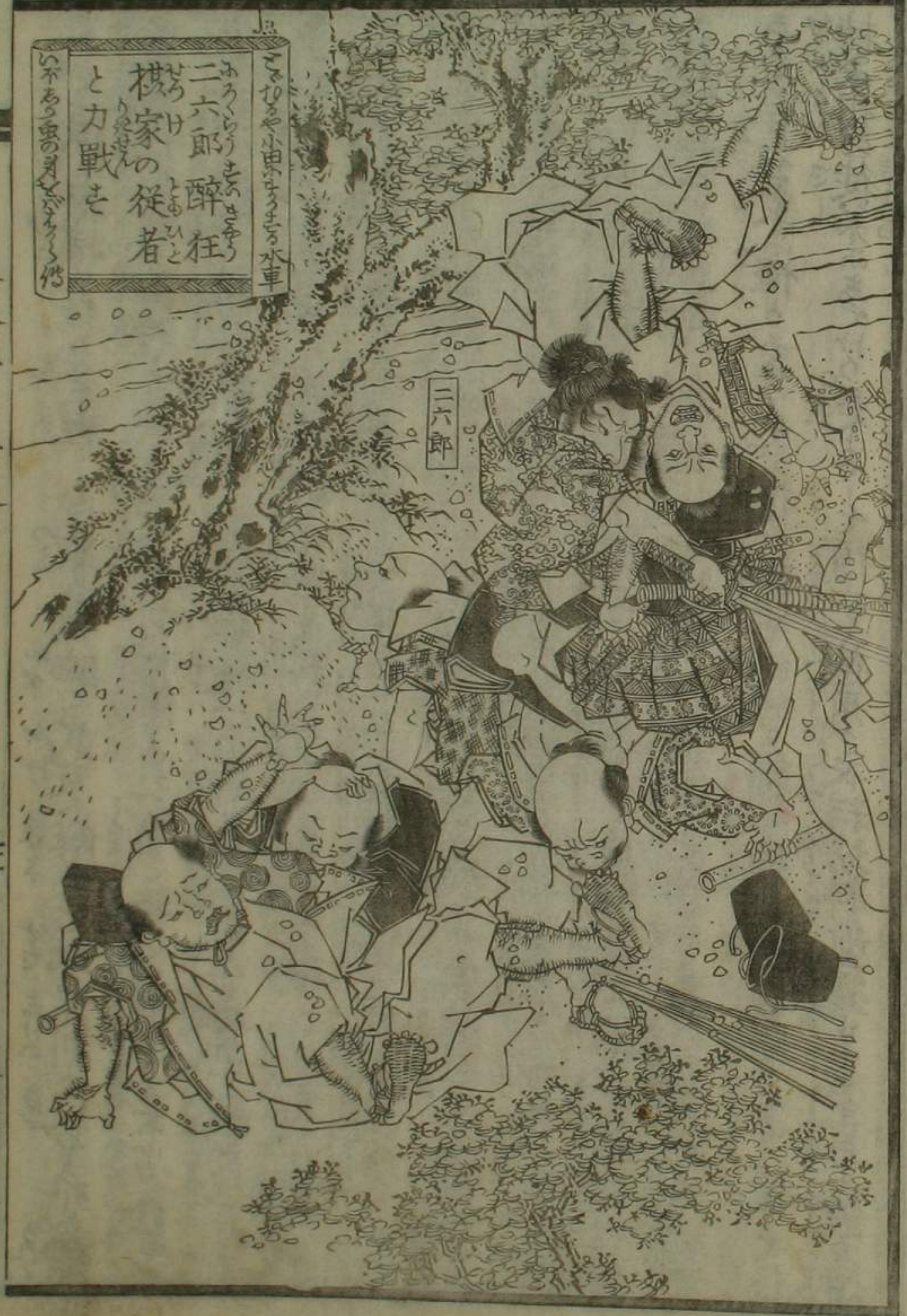
して。四表八表の。空談。の。休暇。の。徒然。を。慰。む。の。勘。も。中。の。一。個。の。走。卒。の。早。詞。説
 經。と。好。る。あり。紀。三。六。向。ひ。て。和。郎。の。近。屬。鎌。倉。の。這。地。徒。の。來。つ。今。那。里。を
 弄。囉。ま。流。の。曲。子。と。知。ら。む。什。麼。詞。と。聞。せ。ま。と。を。二。個。の。走。卒。が。推。林。禁。ゆ。否。々
 咱。們。の。曲。子。の。物。の。本。を。好。し。け。れ。軍。記。と。見。ま。珍。説。の。何。れ。語。と。さ。へ。語。の。語。
 ね。所。ま。ほ。と。請。れ。て。紀。三。六。頭。と。擽。て。否。小。可。俗。骨。を。風。流。の。技。疎。け。れ。曲。子。を。ど。ろ
 少。の。不。え。口。總。角。の。比。も。軍。記。と。嗜。て。寢。食。と。思。ふ。ま。と。あり。今。の。世。の。つ。つ。
 太平記の。幾。番。の。讀。ま。か。し。忘。れ。ね。ど。近。屬。の。太平記。讀。と。喚。做。ま。と。見。ま。る。れ。蛇。
 は。多。い。む。と。ふ。大。家。笑。局。の。入。り。と。開。の。與。あ。む。得。意。の。條。と。讀。ね。く。と。促。ま。件。の。走。卒。推
 林。禁。ゆ。ね。我。先。問。の。あり。餅。師。太平記。の。載。ら。れる。歌。も。酒。家。の。覺。え。ま。
 和。郎。詳。し。これ。を。知。ま。と。問。れ。て。紀。三。六。然。那。軍。記。の。見。え。る。歌。の。先。第。二。の。卷。の。首。小。津
 守。國。香。が。二。歌。あり。是。より。下。同。卷。の。七。歌。資。朝。俊。基。の。辞。世。の。歌。の。中。あり。又。五。の。卷。の



太平記卷の第千高師
直塩谷高貞の正室の出
浴を偷見る處

から観音寺の高頼王。御征伐の風聲ある武具足争何のせ漫ふそと寄る鶴の一
 喚咄々。雀溜る竹牕の蔭子の下皆退。快樂忽地醒ふけ。然るの目信れども。
 紀三六の件の毎漸々親くる。随ふまゝ。多ふ秘事洩れて。這回改元が伴り。將
 軍家の台命をそ大江親兵衛を安房へ還さむ。賸伴當と歇宿と。那身一個を
 這西陣る。邸お抑めて久く。做れる素是。所以ある。具少知り。開けり。おど
 と原る。曩お結城を追放せられ。逆正寺の悪住持徳用。則是改元の姪母子を父の
 本西復六之。初故管領勝元の獨子。改元の生れ時復六が妻初乳ふられて。遂に
 姪母あり。改元と徳用の俗云乳兄弟中。當初他が乳名。三六郎と喚做。具改
 元と同庚也。五箇月許の兄。其子三六郎。再乳母との者。謀て母子舎せ。子類
 たる。隨ふ三六郎。主君の後堂の局也。公子と同様。成長り。果報あれ。稚時より心
 驕り。人を人ともせぬ癖也。十二歳及びて。膂力衆を抜出。武藝と好。酒と嗜。醉

時。の。猛。く。勇。め。り。あ。ど。り。と。父。の。主。り。け。勝。元。も。他。に。必。萬。夫。を。當。の。勇。士。と。さ。る。べ
 けれ。最。馮。心。一。思。ひ。外。日。め。懲。き。と。る。は。よ。り。徳。用。の。三。六。郎。の。忌。憚。り。己。が。隨。を
 進。止。ま。る。の。故。同。藩。多。近。習。外。様。の。老。黨。若。黨。雜。色。奴。隸。婢。女。炊。婦。を。害。怕
 る。も。の。識。る。も。言。て。情。地。お。辨。け。て。悪。少。年。の。者。を。さ。り。け。有。忌。程。三。六。郎。の。手
 十四。の。春。三。月。の。時。候。主。君。勝。元。の。公。子。改。元。お。俱。せ。れ。嵐。山。の。花。觀。お。た。け。折。大
 堰。川。の。上。の。憶。り。時。の。関。白。藤。原。持。通。公。の。清。涼。寺。へ。詣。り。御。車。お。撞。見。なり。瑣。細。を
 る。の。より。と。死。伴。の。毎。と。閉。諍。お。速。び。改。元。の。伴。當。は。老。黨。の。敵。を。憚。り。主。宰。制
 其。里。外。へ。公。子。と。諫。め。路。次。を。の。て。早。く。歸。館。お。赴。け。獨。徳。用。の。三。六。の。主。親。の。威。勢。を
 負。ま。け。その。身。の。武。士。勢。勇。力。の。顯。さん。と。思。ひ。足。踏。任。の。連。の。お。找。を。狼。藉。及。び。程。お。大。庭。お
 撰。家。の。人。を。或。蹴。仆。毆。伏。せ。雜。當。二。名。お。痲。を。負。ま。る。程。お。猶。且。一。個。の。牛。飼。舎。人。お。敷
 れて。即。死。ま。り。け。三。六。郎。外。の。援。の。兵。お。け。れ。平。小。三。郎。お。捉。籠。れ。筋。力。衰。へ。勢。お。窮



二六郎 酔狂
 横家の 従者
 と力戦さ

二六郎

八代傳九郎卷三十四

三十一

大塚堂藏



八代傳九郎卷三十四

大塚堂藏

是の隊は擗捕されけり。是輕く罪なれ。既武家解され。既死刑に定められ。他
 父香西復六は勝元の時より當家第一の權宰なれ。富と勢いと両方主劣らば
 此の子の與ふ。王勝元は歎息亭へ。情地を救ひて。未め又横家の金瘡見と。數多殺され
 牛飼舎人の宅着ふ。黄白を餓して。他死罪を宥められ。出家せしむ。死者の菩提を
 せん。約束きて。怨を解き。計策する。程勝元も亦六郎。其子政元と。乳兄弟の因あり。と
 愛する心減く。ね室町殿政。密朝と。他が命との呪詞を。被さる。願書は。現千金
 子市に棄れ。内外の帮助より。二六と十五未滿の者。宜く出家と。遂に。死罪恩免
 あり。公武一極の裁許を。二六と牢と。出され。祝髪と。度牒と。賜り。法名。徳用と。喚做
 せ。權且父の香華院に在り。然れども。阿容と。京師の寺院に在る。王親の與。外聞宜
 あり。且公家小憚り。あれども。父復六計。法縁。就下總。結城の逆足寺。遣して。住
 持未得の徒。弟ふ。是より。復六。徳用。衣料。坊料。盤纏。も。手母。餓り。遣

↑記

是賄ひ匿か。られ。徳用の沙弥。時より。師兄弟。と。踰て。早く。役僧。做登り。方
 外酒茶の友。多かり。有。程。故當國の守り。結城氏の滅亡。この年。來り。歎
 舊臣。後黨。計議。旋。志仁の。乱離。時。先君氏朝の子。成朝。冊立。復城の
 據り地。略。再興の功。成り。か。室町殿。政。告。免許を。請。欲。逆足寺の。役僧。徳
 用。京都の。管領。勝元の家。の。權宰。香西復六。時。長。愛子。勝元の。嫡子。政元。と。乳兄
 弟の。因。あり。今。番。室町殿。ま。使。遣。僧。優。者。と。衆。議。既。一。決。隨。即。徳
 用。結城の。舊臣。兩名。相。副。東。西。齋。就。京師。遣。果。徳用。拵。室
 町殿。許。容。即。使。成。朝。君。臣。舊。罪。恩。免。御。教。書。徳用。渡。賜。其。家。再。興。障。多
 君。臣。素。懐。遂。成。朝。則。賞。と。逸。足。寺。の。寺。格。推。登。別。徳用。坊。料。取。せ
 且。金。銀。多。與。其。後。任。持。未。得。老。退。院。せ。欲。折。徳用。寺。王。死。罪。恩。免
 あり。前。功。と。羽。振。宜。れ。孝。順。清。白。の。望。影。西。退。徳用。卒。逆。足

寺の住持の作りより以来萬事已が隨せざるに或武を講力技を好む行状出家人の
 相忘るるのやえおれ成朝君臣自餘の檀越も他前功患ひ易て許く年来と靡程の
 今茲四月中旬大法師が宿願を果さんとて結城を嘉吉の古戰場を先亡追薦の大
 念佛を供類して結願する日徳用是と酷く思ひく同惡の衆徒を招聚し結城の
 三驕臣長城端利取者經稜根生野素頼們を浮誅せし大並ふ七武士を捕捕ま
 欲する及て那身の生拘られて破戒の罪免る方なく成朝王の沙汰とてオ命を助
 けれ彼が徒弟堅削們幾名の兇徒と俱結城を追放せしけり這一條既けり前四
 具るに看官通て知れるるべし余程徳用は投て往方の甚重なる親より外は倍時世
 馮了人のあつと思へ同憂相憐む堅削をの伴ひて日歩夜宿の辛くと京師の
 歩の親香西復六の宿所造り對面を請て己の上を報知するに眞実の事とて復
 六も思ひよる我子を訪れて訝りて躬て閑室を召入れてる來意を尋る徳用答る

然し以見徳重も一個の徒弟と伴ひて物と思せざるその禍の馮處是一朝のあ
 めを抑我寺の大檀那結城下總の新判官成朝の傲慢短慮の將領とて那家再
 自の創より乱改非法甚く是判近屬の安房の里見謀合とて謀及の事とて
 故今茲の春より大と喚做き一個の賣僧の里見方なき結城の來り嘉吉の古戰場
 其算と締ひ先亡の菩提を唱て百見念佛を執り行ふ程の里見の士卒三百名來會と
 是を資けの結願の朝より米錢許す施行しめ貪民を哄誘し我寺と專畧と
 大を住持の做き欲する他們が奸詐虎狼心と天知る地知る人も知世の風聲を隠れる
 けれ見よのそら歎いて城主訴道理と演て諷諫の詞を盡るかも成朝惑ふ信
 容れき越結城の忠臣長城取者根生野と喚做き者俱に主君を諫難て己とる隊
 兵を領て大並ふ里見の士卒を捕捕ま欲する程我寺屬院の法師們は法縁を就死
 催促せられ共にお向ふと望まらる見よの驚憂ひて衆徒を制入為す這堅削を

俘^{とら}て^ひ得^え後^{のち}より^も赶^おり^て大^{おほ}左^さ道^{みち}の^の幻^{まぼろし}術^{じゆつ}あり^し且^{かつ}那^な里^り見^みの^の主^{しゆ}平^{へい}の^の内^{うち}中^{ちゆう}大^{おほ}と^りて^し氏^{うぢ}
 と^を做^な志^し七^{しち}八^{はち}個^この^の勇^{ゆう}士^しあり^し幻^{まぼろし}術^{じゆつ}力^{りき}戦^{せん}而^{して}入^い意^いの^の表^{あは}れ^しと^りて^し忠^{ちゆう}臣^{しん}長^{ちやう}城^{じやう}堅^{けん}名^な
 根^ね生^{せい}野^の隊^{たい}兵^{へい}と^共命^{めい}と^りて^し殞^{ひん}我^{われ}寺^{てら}の^の衆^{しゆう}徒^た勇^{ゆう}僧^{そう}も^も或^{ある}の^の敷^{しき}れ^り或^{ある}の^の亦^{また}生^{せい}拘^これ^りも^も三^{さん}三^{さん}の^のふ
 成^{なり}朝^{あさ}及^{及び}家^けの^の家^け臣^{しん}小^{せう}山^{さん}朝^{あさ}重^{じゆう}の^の尚^{しやう}醒^{せい}の^の大^{おほ}尊^{そん}信^{しん}那^な大^{たい}士^し們^{めん}を^を罪^{つみ}多^{おほ}と^りて^し及^{及び}我^{われ}身^み
 と^堅削^{けん}衆^{しゆう}徒^たの^の破^{やぶ}戒^{がい}を^を斬^つの^の罪^{つみ}人^{ひと}と^りて^し慘^{げん}酷^{こく}牢^{らう}獄^{ごく}の^の敷^{しき}れ^りか^かも^も皇^{かう}義^ぎの^の那^な家^け再^{さい}興^{きやう}の^の
 舊^{ふる}功^{こう}の^の殺^{ころ}し^もの^の法^{ほう}衣^いと^と剥^は奪^{だつ}り^て獄^{ごく}中^{ちゆう}て^て竟^{つひ}に^に追^お放^{はな}せ^られ^り昔^{むかし}法^{ほう}然^{ぜん}及^{及び}親^{おや}亦^{また}鳥^{とり}
 日^ひ蓮^{れん}の^の三^{さん}名^な僧^{そう}を^を弘^{こう}法^{ほう}の^の為^{ため}に^に罪^{つみ}を^を負^おひ^てり^し或^{ある}の^の白^{はく}刃^{にん}の^の下^{した}命^{めい}危^{あや}く^し或^{ある}の^の配^{はい}
 所^{ところ}の^の起^{おこ}居^いの^の艱^{げん}苦^くと^と凌^{りやう}死^しの^のひ^ひを^を誠^{まこと}を^を照^あき^き天津^{てんじん}日^{にち}の^の光^{ひかり}と^と俱^あに^に危^{あや}解^げて^て未^{いま}世^{せい}の^の祖^そ師^しと^と宗^{そう}
 ら^ら今^{いま}の^の我^{われ}身^みも^も似^にて^てと^と詞^{ことば}巧^{たくま}非^ひ飾^{かざ}り^し良^よ將^{しやう}名^な僧^{そう}智^ち男^{なん}の^の取^と具^ぐ士^しと^と誣^{しゆ}言^{げん}涯^{げん}の^のま^まら^ら
 畢^{ひつ}竟^{きやう}德^{とく}用^{りやう}の^の謗^{ぼう}怨^{えん}仍^{なほ}れ^り後^{のち}の^の話^わ説^{せつ}甚^{しん}麼^まを^を開^{ひら}け^り又^{また}復^{また}下^{した}の^の回^{まわ}解^げ分^{ぶん}を^を聽^きね^がり^し
 南^{なん}總^{そう}里^り見^み八^{はち}大^{たい}傳^{でん}第^{だい}九^く輯^{くわい}卷^{くわん}之^し二^に十^{じゅう}四^し終^{しゆう}

天保九次戌戌年又十月晦戌戌
 凌取此則其校訂本也

洗澤興邦藏本

